

小高小・小高中の今後のあり方と 義務教育学校の方方向性について (概要版)

1.はじめに

本資料作成の目的

- P T A 会長・副会長主催の保護者座談会などで、保護者の皆さまから多くの貴重なご意見・ご質問をいただきました。

「今の学校のままでなぜダメなのか」

「新しい学校がどんな学校になるのか、具体的なイメージが持てない」

といった声が寄せられています。

- 本資料は、このような疑問や不安を少しでも解消し、皆さまと「今後の小高小・小高小のあり方」を考えるための資料として作成しました。

- なお、資料については、疑問や不安を段階的に解消し、より深くご理解いただくため、2回に分けて説明します。今回は、今後の議論の前提となる基本的な考え方についてを説明します。

2.なぜ、学校の形を変える必要があるのか

本章では、小中一貫教育の有効性や市が目指す教育、施設一体型義務教育学校を目指す理由について説明します。

2-1 小中一貫教育（義務教育学校）の重要性：本編P7～P22

2-2 学校の形を変える必要性：本編P28～P38

2-3 施設一体型義務教育学校で実現したい「目指す姿」：本編P39～P50

小中一貫教育の有効性

本編 8 P～2 1 Pより

- I 義務教育9年間の連続性に配慮した教育活動
- II 小・中の教員が連携した学習指導の工夫
- III 6・3の区切りにとらわれない柔軟な指導体制の構築
- IV 小・中学校間に存在する大きな段差の緩和と円滑な接続

これら I～IVの「重要性」が増してきた



義務教育9年間の一貫した教育課程の編成



小中一貫教育の導入の有効性が認められる

学校の形が違うと取り組みはどう違うのか？

【具体例：教科・学習】算数から数学への橋渡しはどう違う？

【現象】小6から中1へのステップにおける「つまずき」

小6の「算数」から中1の「数学」へと進む際、抽象的な概念（正負の数や文字式など）への移行でつまずく生徒が出やすい。

市内の他の小中学校	小高小・小高中 (施設分離型小中一貫教育実施校)	義務教育学校 (施設一体型)
中学校区の小中教員が研究授業で系統性等について協議を行っている（基本年1回）	9年間を見通した教育課程編成は、「生活・総合」のみのため、「市内の他の小中学校」と同じ取り組み。 【県内の施設分離型小中一貫教育実施校の状況は】 - アンケートで確認した結果、小高と同様、9年間を見通した教育課程は編成されていない。	- カリキュラム自体が最初からつながっている。 9年間のブロック制カリキュラムに基づき、学年の壁を越えて、柔軟に切れ目なく学べる。（時数の弾力化や内容の前後入替を柔軟に実施）

具体的な事例では．．．

- 算数から数学への移行時に生じやすい「つまずき」を減らすため、概念のつながりを再整理。
- 例えば、前期課程での「比例・反比例や図形の見方」の学習において、将来の「関数や幾何証明」を見据えた概念理解を意識的な問いかけとして組み込み、スムーズな接続を図っている」など、**前期課程（※1）の授業の中で、後期課程（※2）でつまずきやすいポイントを見据えて授業を行っている。**

（※1）前期課程：義務教育学校において、通常の小学校1～6年生に相当する期間

（※2）後期課程：義務教育学校において、通常の中学校1～3年生に相当する期間

学校の形が違うと取り組みはどう違うのか？

【具体例：生活指導】「中1ギャップ」へのアプローチはどう違う？

【現象】小6から中1へのステップにおける「つまずき」

小学校から中学校にかけて、教育活動は大きく変化するため、生徒は精神的な負荷を感じやすい。

市内の他の小中学校	小高小・小高中 (施設分離型小中一貫教育実施校)	義務教育学校 (施設一体型)
進学前に「引継ぎシート（カルテ）」を共有し、個性を把握。	- 進学前に「引継ぎシート（カルテ）」を共有する以外に、行事や情報共有の機会が多いためギャップの緩和に繋がっている。 【県内の施設分離型小中一貫教育実施校の状況は】 - アンケートを確認した結果、学校間の合同の行事や乗り入れ授業等の取組が行われているため、小高とほぼ同様。	「進学」というイベント自体がないため、環境変化による不安がなく、安心してのびのびと学べる。 - 校長・教職員組織が一つのため、9年間の育ちを日常的・組織的に共有。

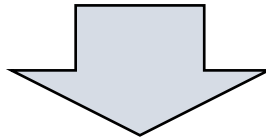
具体的な事例では．．．

- 児童生徒の成長の足跡や将来のあるべき姿について共有することができ、学習指導や生徒指導に生かされている。
- 校務分掌上、同じ役割に前期後期の教職員がそれぞれ最低一名いるので、おのずと職員室内での交流が生まれ、情報共有がスムーズになっている。

他自治体の施設分離型小中一貫教育実施校の現状

福島県内の施設分離型小中一貫教育実施校に、アンケートを実施した結果・・・

- 施設分離型では、施設分離に伴う時間や日程等の調整業務が、多忙な教職員の大きな負担となっている。
 - 施設が分離していることから教職員間の密な連携や綿密な協議の機会が限定的であり、現在ある教育課程を再調整しての9年間を見通した系統的な教育課程の編成や、深く踏み込んだ連携活動が難しい。
- ⇒小高区と同様の課題を抱えており、課題の解決ができていなかったり、連携や取り組みを十分に実施できていなかったりと、小中一貫教育の効果が限定的になっている。

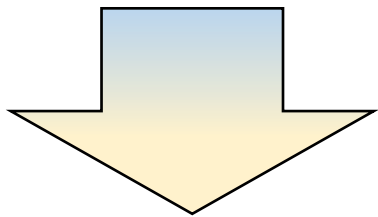


- そのため、施設が一体化すれば、時間調整や移動の課題が解消され、系統的な教育活動、乗り入れ授業、合同行事の充実など、より多様な連携が可能になると期待されている。

施設一体型義務教育学校を目指す理由

施設分離型の小中一貫教育では、ある程度の成果は認められるものの、施設が離れていること、学校組織が異なることによる課題がある。

施設分離型の形態では、これらの課題を根本的に解決し、系統的な教育活動、乗り入れ授業、合同行事の充実といった、理想の小中一貫教育を実現することは難しい。



施設一体型の義務教育学校とすることで、課題を解消し、子どもたち9年間の学びを一貫したものとし、小中一貫教育の効果をより高める。



施設一体型義務教育学校を目指す理由

施設一体型義務教育学校のイメージ図

現状

教職員の努力により、
小中一貫教育の取組は
進んでいます。



主な障壁（課題）



施設の分離に
よる障壁（課題）



文化的・制度的な
障壁（課題）



時間的制約等により、
取組に限界があります。

解決方法

義務教育学校の 設置

障壁を取り除き、同一施設内で
小中学校を一体的に設置します。



期待される効果

1 学びと成長の連続性の確保



- ・子どものめざす姿の共有
- ・9年間を通した
カリキュラムの編成
- ・系統的な指導の充実

2 教職員の統一による学校運営

校長のリーダーシップのもと、
全教職員で統一した学校運営
を行います。



3 子どもと関わる時間の増加

日常生活における
子どもと関わる
時間が増加します。



義務教育9年間の学びの一貫性を実現し、
小中一貫教育の効果をさらに高めていきます。



(1) 学校の形を変える必要性

①小高で目指す教育の方向性

目指す小高区の実現したい学校の姿（イメージ案）

このイメージ案は、

- 南相馬市教育委員会の小中一貫の取り組み方針
- 令和8年2月・3月に実施した保護者懇談会及び保護者意識調査で出された、保護者の方が考える「目指す子ども像」とそれを実現するためのアイデア

をつなげ「**目指す小高区の実現したい学校の姿（イメージ案）**」として、作成したものです。このイメージを基に、今後フェーズ2の中で、皆さんとともに具体的なことを決定してまいります。

◆ 学 校 像：～おだかの誇りを未来へつなぐ学校～

➤ なりたい姿：

● 「地域」が教室になる

～おだか全体で子どもたちを見守り、育てる～

● 「9年間」でつながる

～学校の壁をなくし、一人ひとりの「やりたい」を叶える～

● 「未来」を生きぬく力になる

～学校内で完結しない、実社会で役立つ実践的な学び～

施設一体型義務教育学校で実現したい「目指す姿」

【つながる学び】

「学んだ知識＋使えるスキル」
で学ぶ楽しさが9年間ずっと続く学校へ

- 「おだか」から世界へ！「使える英語力」の育成
- 専門性を生かした多様な学び

【つながる探究学習】

「故郷への誇り＋自ら学ぶ力」で
南相馬から未来へ羽ばたく力を育む

- 古きを知ることからスタート！伝統と新しさの融合
- 未来を創る人材へ！「やりたい」を極める探究的な学び

【つながる居場所づくり】

「地域の温かい見守り＋安心できる空間」
でいつでも自分らしくいられる場所を

- いつでも誰かが見守っている！「チームおだか」の安心環境
- 中学生にもサードプレイスを！放課後の居場所づくり
- 違いを認め、共に育つ！異年齢交流と心のケア

【つながる地域とキャリア】

「まちぐるみの連携＋外部人材の活用」
で子どもたちが将来の夢を描ける環境に

- まち全体がキャンパス！地域資源をフル活用した実践的キャリア教育
- 興味のスイッチを押す！最先端の学びと多様な選択肢
- 「生きる力」へ直結！学校内で完結しない学び

3.新しい学校は、どんな学校になるのか

本章では、県内の義務教育学校での教育活動の事例を踏まえた、新しい学校での教育活動のイメージを説明します。

3-1 県内の義務教育学校の事例：本編P52～P66